

Abonnementkonzertに見る ウィーン楽友協会のコンサート・マネジメント

横 坂 康 彦

はじめに

ウィーンの音楽事情を語る時、楽友協会（Gesellschaft der Musikfreunde in Wien）とコンツェルトハウス（Wiener Konzerthaus）での各コンサート・シリーズ、そして国立歌劇場（Wiener Staatsoper）とフォルクス・オーパー（Volksoper Wien）でのオペラ公演を欠くことはできない。もちろんシェーンブルン宮殿でのSommernachtskonzertや、宮廷礼拝堂を初め無数にある教会で行われているコンサート、また観光客相手の種々の催し物まで含めれば枚挙に暇はないが、ウィーン音楽文化の象徴となる確固としたステージとして先の四本柱は揺らぐことがない。これらはいつも大きな話題となり、今年はプレミエ何本、レギュラー演目には何が生まれ、どんな出演者が登場するかなど喧しい。しかし、それらのシリーズを掘り下げて分析的に考察した場合、それぞれにどんな特徴があるのか、またそれらが音楽都市ウィーンにどんな顔をもたらしめているのかを知ることは、マネジメント教育に関わる者にとって何となく興味深いところである。実際に2014～2015年シーズンだけでも、楽友協会では30の、コンツェルトハウスでは13の 카테고リーに分類されたシリーズが多彩なステージを提供している。そこでこの小論では、まず楽友協会でフル編成のオーケストラを対象とした各コンサート・シリーズに着目し、資料（注1）に基づいてそれぞれの特色を明らかにしてみたい。マネジメントの実態を知るためには突っ込んだ調査が必要なことは重々承知だが、それにはまずシリーズ全体の総合的な理解が前提となるからである。

1 Das Goldene Musikvereinsabonnement I・II

楽友協会のシリーズとしてまっさきに挙げられているのが Das Goldene Musikvereinsabonnement I と II である。I は7種類のコンサートを含み、国際的に評価の高い海外のオーケストラがそれぞれに縁の指揮者と来演するステージで、概略を記すと次のようになる。

- ① フェドセーエフ指揮チャイコフスキー響モスクワ（9/18/19：30）→プロコフィエフ：〈ロメオとジュリエット〉抜粋とピアノ協奏曲第2番（Pf:レオンスカヤ）、ドヴォジャーク：交響曲第9番〈新世界から〉
- ② アーノンクール指揮ウィーン・フィルとシェーンベルク合唱団（11/9/11：00）→シューベルト：〈ロザムンデ〉と交響曲第7番〈未完成〉
- ③ ヤンソンス指揮ロイヤル・コンサートヘボウ管（2015/2/18/19：30）→R・シュトラウス：組曲〈町人貴族〉、マーラー：交響曲第4番
- ④ ミョンフン指揮フランス放送フィル（2015/3/22/19：30）→チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲（Vn:ヴェンゲロフ）、バルリオーズ：〈幻想交響曲〉
- ⑤ ノット指揮グスタフマーラー・ユージェントオーケストラと楽友協会合唱団（2015/4/8/19：30）→マーラー：交響曲第2番〈復活〉

- ⑥ テミルカーノフ指揮ザンクトペテルブルク・フィル (2015/5/7/19:30) →シベリウス: ヴァイオリン協奏曲 (Vn: フィッシャー), ショスタコーヴィチ: 交響曲第5番
- ⑦ ネルソンス指揮バーミンガム市響と楽友協会合唱団 (2015/6/7/19:30) →ワーグナー: 〈パルシファル〉コンサート形式

このシリーズでは、アーノンクール、ヤンソンス、フェドセーエフ、ミョンフンといった一線の指揮者たちが、それぞれの手兵と共に名曲プログラムを披露する。〈新世界から〉、〈未完成〉、マーラーの交響曲第4番、〈幻想交響曲〉、ショスタコーヴィチの交響曲第5番、そしてチャイコフスキーとシベリウスのヴァイオリン協奏曲など、世界中どこかのコンサート・シーンでも名曲として通るものばかりが選ばれ、まずは不特定多数の幅広い聴衆に向けたアピールとなっている。また、深い音楽性と確かな技巧を兼ね備えたエリーザベト・レオンスカヤ (プロコフィエフ: ピアノ協奏曲第2番) やマキシム・ヴェンゲロフ (チャイコフスキー: ヴァイオリン協奏曲)、またピアニストとしても話題となったユリア・フィッシャー (シベリウス: ヴァイオリン協奏曲) などソリスト陣も魅力的である。レパートリーは、オーケストラの鮮烈な色合いやソリストの技巧の妙味を十分に味わうことのできる19世紀以降の作品でかためられ、コンサート形式の〈パルシファル〉が唯一異色な存在である。

中堅どころでは、東京交響楽団の音楽監督としても独自の演奏スタイルを定着させつつあるジョナサン・ノットや、レヴァインの後任としてやはり2014年の秋からボストン響の音楽監督を引き受けたアンドリス・ネルソンスが起用されている。バンベルク響との旺盛な演奏活動も展開しているノットは、本シリーズではグスタフマーラー・ユージェントオーケストラで〈復活〉を指揮するが、マーラーの録音ではすでに高い評価を得ているその手腕に注目が集まることだろう。また、音楽の原体験がワーグナーであったネルソンスにとって、手兵のバーミンガム市響と共にウィーンで繰り広げる〈パルシファル〉は、ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン・オペラ、そしてバイロイトなどでの経験を踏まえた上でのまた格別なステージとなるのではないか。ネルソンスは今シーズン、楽友協会の他のシリーズへの出演も多く、一期一会の独創性を発揮する彼への期待の大きさを反映している。

またこのシリーズは、シューベルトを手がけるアーノンクール以外はピリオド的発想とほぼ無縁の指揮者が出演し、ビギナーや観光客も含めたどのような聴衆に対してもスタンダードな名演を当たり外れなく提供できる危なげの無い構成となっている。そしてアーノンクールにはこれらから独立した Concentus Musicus A&B シリーズが任せられ、すべて彼の指揮でヘンデル〈サウロ〉やハイドン〈四季〉、モーツァルト〈リンツ〉やベートーヴェン〈運命〉他が演奏される計4公演が企画されている。

しかし、シリーズのⅡではかなり内容が変わってくる。

- ① マゼール指揮ミュンヘン・フィル (9/11/19:30) →ヴェーベルン: 〈オーケストラのためのパッサカリア〉, ショスタコーヴィチ: ヴァイオリン協奏曲第1番 (Vn: ラクリン), ブラームス: 交響曲第4番
- ② プレートル指揮ウィーン響と楽友協会合唱団 (10/9/19:30) →ベートーヴェン: 交響曲第9番
- ③ ネルソンス指揮ウィーン・フィル (12/15/19:30) →ハイドン: 交響曲第94番〈驚愕〉, エルガー: 〈ファゴットとオーケストラのためのロマンツェ〉, R・シュトラウス: 〈アルプス交響曲〉
- ④ ビエロフラーベク指揮チェコ・フィルと楽友協会合唱団 (2015/3/21/15:30) →マルティヌー: 〈Denkmal für Lidice〉と交響曲第6番〈交響的幻想曲〉, ヤナーチェク: 〈グラゴール・ミサ〉
- ⑤ ヤンソンス指揮バイエルン放響 (2015/4/19/11:00) →ブラームス: ヴァイオリン協奏曲 (Vn: ツィーマーマン), ストラヴィンスキー: 〈ペトルーシュカ〉
- ⑥ バレンボイム・ピアノリサイタル (2015/5/5/19:30) →シューベルト: ソナタ イ短調, イ長調, イ長調 (D537, 664, 959)
- ⑦ (ホール左側会員のみ) ティーレマン指揮シュターツカペレ・ドレスデン (2015/5/20/19:30) →グバイドゥーリナ: ヴァイオリン協奏曲 (Vn: クレーメル), ブルックナー: 交響曲第9番。それに代わる選択肢として (ホール右側会員のみ) ティーレマン指揮シュターツカペレ・ドレスデン (2015/3/21/19:30) →ワーグナー: 〈ターンホイザー〉抜粋と〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉抜粋, シュー

ベルト：〈アルフォンソとエストレッラ〉抜粋，ブルックナー：交響曲第4番〈ロマンティック〉

IIでは、マゼール、プレートル、ティーレマンといった個性的な指揮者が起用され、この人ならではのレパートリーを聴こうという視点が加わっている。ティーレマンのブルックナー4番と9番などはまさに聴きどころであり、今シーズン初のブルックナーは大きな話題となろう。ただしこのコンサート（上記⑦）はホール左右会員での選択肢になっているから、どちらか1曲が聴けるという設定である。このような選択肢は日本では見かけたことはないが、残り半分はスポンサー関係に渡されているのだろうか。

オールラウンド・プレーヤーのマゼールもショスタコーヴィチやブラームスで聴かせる審美主義的な演奏は他の追従を許さない（ただし、登壇する前に逝去したので実現しないが）。マルティヌーとヤナーチェクは、東欧の音楽を熟知したピエロフラーベクとチェコ・フィルならではの曲目であるし、ネルソンスが得意とするハイドン、そして〈アルペン交響曲〉も型に捕らわれぬおもしろさが期待できる。ベテランでは両シリーズに共通してヤンソンスが出演するが、ロイヤル・コンヘルトヘボウ管やバイエルン放響といった国際的なオーケストラを振り分けて、マーラーの4番とブラームスのヴァイオリン協奏曲など要としての役どころが任せられており、信頼度の高さがうかがえる。ヴァイオリン協奏曲に登場するツィマーマンとクレメル、そして、オーケストラ・コンサートの合間に唯一企画されているピアノ・リサイタルに出演のダニエル・バレンボイム（オールシューベルト・プログラム）など、ソリスト陣も充実している。

レパートリーは、全体的にIより踏み込んだ関心を持つ聴衆を想定していることは否めない。名曲の間に散りばめられたエルガーの〈ファゴットとオーケストラのためのロマンツェ〉やグバイドゥーリナのヴァイオリン協奏曲、マルティヌーの〈交響的幻想曲〉やヤナーチェクの〈グラゴール・ミサ〉、そしてシューベルトのオペラ〈アルフォンソとエストレッラ〉抜粋など、ナマで接する機会の少ない作品と出会うこともまたコンサート・シリーズの醍醐味と認識している通向けの設定と言えるだろう。

I, II共に全7公演のチケット価格は、最高649ユーロ（約94,000円）から最低37.80ユーロ（約5,500円・立席）まで8段階に設定され（コンサート1回当たりの最高額は1枚約14,000円、最低額は1枚約3,600円）、セット券は、値段の変わらない立席を除き、それぞれ9%引きとなる（この割引はどのシリーズにも共通なので、これ以後記載しない）。

2 Die Grosse Symphonie A & B

Die Grosse Symphonie A & Bでは、Das Goldene Musikvereinsabonnement とは明らかに異なった特色が打ち出されている。内容は次の9公演であり、それぞれに同じプログラムが二日続けて演奏されて、Aは初日の、Bが二日目のコンサート・シリーズとなる。曜日が異なるだけで内容は変わらない。

- ① フェドセーエフ指揮チャイコフスキー響モスクワと楽友協会合唱団（9/21&22/19:30）→ドヴォジャーク：〈スタバト・マーテル〉
- ② ホーネック指揮ウィーン響（以下、同じ楽団につき省略）（10/30&31/19:30）→プロコフィエフ：ピアノ協奏曲第3番（Pf：ワン）、マーラー：交響曲第1番〈巨人〉
- ③ アフカム指揮（11/5&6/19:30）→リゲティ：大オーケストラのための〈ロンターノ〉、シベリウス：ヴァイオリン協奏曲（Vn：カヴァコス）、チャイコフスキー：交響曲第5番
- ④ ジョルダン指揮（12/3&4/19:30）→ヴェーベルン：管弦楽のための六つの小品、シューベルト：交響曲第4番〈悲劇的〉、R・シュトラウス：〈英雄の生涯〉
- ⑤ ノット指揮（2015/1/14&15/19:30）→バルトーク：ヴァイオリン協奏曲第1番（Vn：フラング）、ブルックナー：交響曲第3番
- ⑥ ジョルダン指揮（2015/3/4&5/19:30）→シューベルト：交響曲第6番、マーラー：交響曲第4番
- ⑦ ド・ビリー指揮+楽友協会合唱団（2015/4/16&17/19:30）→メンデルスゾーン：交響曲第4番〈イタリア〉、ブッチーニ：〈ミサ・デ・グロリア〉
- ⑧ エルトツ指揮（2015/5/13&14/19:30）→シベリウス：〈悲しみのワルツ〉、〈クオレマ〉など、交響曲第3番、ハイドン：チェロ協奏曲第1番（Vc：ガベッタ）、交響曲第86番

- ⑨ ヴァルチュハ指揮 (2015/6/10&11/19:30) →ハイドン:交響曲第85番〈ラ・レイン〉,メンデルスゾーン:ピアノ協奏曲第1番 (Pf:スタンチュール),ドビュッシー:〈海〉,ラヴェル:〈ラ・ヴァルス〉

このシリーズは、Das Goldene Musikvereinsabonnement I (9月18日)に出演するフェドセーエフとチャイコフスキー響をそのまま9月21日と22日に抜擢する他はすべてウィーン交響楽団が演奏し、それを7人の指揮者が振り分けるという構成である。つまりオープニングは海外のオーケストラが飾り、後は地元の実力派オーケストラを個性の異なる指揮者でじっくり聴き比べる趣向である。「偉大な交響曲」とうたうように、オープニングの〈スタバト・マーテル〉(ドヴォジャーク)以外はどのプログラムにも交響曲は必ず含まれるが、Das Goldene Musikvereinsabonnement の大部分のコンサートでも交響曲は演奏されるから、タイトルそのものにあまり意味はなさそうである。ただ、前シリーズではほぼ19世紀以降の交響曲に絞られていたのに対し、こちらでは、マーラー、ブルックナー、チャイコフスキー、メンデルスゾーン、シューベルト、ハイドンと古典派に遡って、スタイルに幅が出てくる程度の違いはある。

このシリーズの聴きどころは、あくまでも7人の指揮者にウィーン響がどう反応し、どんな音楽を奏でるかであるから、指揮者陣にはキャリア、年齢ともに幅広い人材が起用されている。そのため、前シリーズには見られなかった若手や中堅が増えており、その多彩さこそがまさにこのシリーズの特色なのである。それと同時に、7人それぞれの解釈をどう受け止め、どのような音楽とするのか、ウィーン響の力量が問われるところでもある。

指揮者では、熟練度でマンフレッド・ホーネックが一頭抜きん出ており、その対角線上に位置するダヴィッド・アフカムは2012年にウィーン響にデビューしたばかりの若手である。フライブルクに生まれた31歳のアフカムは、地元の音楽大学とワイマールのリスト音楽院に学んだ後、2008年のドナテッラ・フリック指揮者コンクールでの優勝をきっかけにロンドン響のゲルギエフのアシスタントを務め、それ以後、コンサートへボウ管、フィルハーモニア管、シュターツカペレ・ドレスデン、シカゴ響、クリエヴァンド管、そしてNHK交響楽団などに客演するなど、めきめきと頭角を現している。レパートリーの拡大を目指して挑戦し続けるアフカムが、シベリウスのヴァイオリン協奏曲を得意とするレオニダス・カヴァコスとこの作品で共演する他、定番チャイコフスキーの交響曲第5番をどう聴かせるのか、若手の躍進ぶりを目の当たりにできる魅力的なステージである。

なおホーネックとユジャ・ワンのプロコフィエフ、そしてマーラーの〈巨人〉は、ほぼ満席の聴衆の中、ウィーン響の管楽器セクションに一部不満は見られたものの、ワンのダイナミックな切れとそれを受けて立つホーネック、そして指揮者の働きかけに呼应しながらも音楽を自発的に創ろうとするオーケストラの秀演に、このシリーズの重要性を再認識させられた(10月31日)。

今シーズンからウィーン響の首席指揮者に就任したフィリップ・ジョルダンも大きな話題である(異なったプログラムの2公演を担当)。1974年、スイスに生まれたジョルダンは、ダニエル・バレンボイムのアシスタントを務めるなど一貫してオペラ畑を歩み、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立オペラ、ロイヤル・オペラ、メトロポリタン・オペラなどへと活躍の場を広げてきた。その傍らニューヨーク・フィルにデビューするなどコンサート指揮者としてのキャリアも築きつつある。ウィーン響の首席という、コンサート指揮者としてヨーロッパ有数のキャリアに乗れるかどうかの正念場を迎える彼にとって、シューベルトの〈悲劇的〉とR・シュトラウスの〈英雄の生涯〉、そしてウィーン聴衆が最も好むマーラーの4番はまさに試金石と言てよい。

ジョルダンより10年ほど先輩にあたるパリ生まれのベルトラン・ド・ビリーは、主にドイツでオペラ指揮者としてのキャリアを積み重ねてきた。声を扱うことに長けた彼のプッチーニは、このシリーズ唯一のイタリアものである。首脳陣との対立で出演をキャンセルしたウィーン国立歌劇場の二の舞にはして欲しくない。

東ヨーロッパからは二人の中堅指揮者が抜擢された。エストニアのタリンで1971年に生まれたオラリ・エルツはラトヴィア国立交響楽団を振り出しにヨーロッパやオーストラリアでキャリアを築き、読売日本交響楽団にも客演している。前半では十八番のシベリウス(小品と交響曲第3番)を、そして後半ではハイドンの交響曲第86番、そしてチェロ協奏曲第1番をソル・ガベッタと共演するユニークなプログラムである。エルツと同世代のユライ・ヴァルチュハは地元スロバキアで民族音楽を学んだ後、1995年から2年間、名教授

イリヤ・ムーシンの下で本格的に指揮法を学び、さらにパリ国立音楽院で研鑽を積んだ後、2003年にフランス国立管にデビューした。その後しばらくフランスを拠点に活躍していたが、ドイツやイギリス、またアメリカに活動の場を広げ、2011年にはハイティンクの代役でベルリン・フィルの定期にデビューする幸運を掴んでいる。ヴァルチュハはハイドンの交響曲〈ラ・レイン〉に始まり、メンデルスゾーンのパiano協奏曲第1番をジャスミンカ・スタンチュールと共演し、後半はこのシリーズ唯一のフランスもの（ドビュッシーの〈海〉とラヴェルの〈ラ・ヴァルス〉）で締めくくる多彩なプログラムを組んでいる。

このように、Die Grosse Symphonieは大胆に若手や中堅を登用したヴァリエーションに富むプログラミングが特色であり、前シリーズに無かった冒険がある。また、さまざまな音楽的背景を背負ってここまで生き残ってきた中堅指揮者たちにとっては、未来の巨匠としての一步を踏み出すための貴重な機会である。しかしそれは、同一のオーケストラと共に複数の指揮者たちが築き上げるコンサート・シリーズであることから、楽団はもとより聴衆にも各指揮者の力量が明らかになる試練のステージでもある。

プログラム構成は、大曲の一曲、また二曲ぐらいでざっくりと組まれていた前シリーズに比べ、小品を交えることで演奏曲目自体が増えて、コンサート1回ごとの楽しみが多い企画となっている点にも注目したい。（その意味で、日本のコンサートなどでの通常のプログラミングに似ている。）その中に、適度なコントラストや変化を織り込んだ興味深いシリーズである。

全9公演のチケット価格は、最高693ユーロ（約100,500円）から最低40.50ユーロ（約5,800円・立席）までの9段階に設定（前シリーズで同価格のバルコニーとギャラリーが、こちらでは別れる）されている（コンサート1回当たりの最高額は1枚約11,000円、最低額は1枚約2,700円）。こちらはウィーン響が公演を担当することが反映されてか、Das Goldene Musikvereinsabonnementに比べていくぶん安く設定されている。

3 Meisterinterpreten I・II・III

このシリーズはDas Goldene Musikvereinsabonnementを基本とし、ヴァリエーションを加えたものである。マゼール、プレートル、ヤンソンス、テミルカーノフといったDas Goldene Musikvereinsabonnementの指揮者陣が、さらに個性的なプログラムで勝負するという意味で「偉大な解釈者」シリーズなのだろう。Iの概略は次のようになっている。

- ① マゼール指揮ミュンヘン・フィル（9/12/19：30）→R・シュトラウス：ホルン協奏曲（Hr：ブリュクナー）、ブルックナー：交響曲第3番
- ② プレートル指揮ウィーン響と楽友協会合唱団（10/8/19：30）→ベートーヴェン：交響曲第9番
- ③ ムーティ指揮シカゴ響（10/29/19：30）→メンデルスゾーン：序曲〈海の静けさと幸ある航海〉、ドビュッシー：〈海〉、スクリャービン：交響曲第3番〈神聖な詩〉
- ④ ヤンソンス指揮ロイヤル・コンサートヘボウ管（2015/2/19/19：30）→ドビュッシー：〈管弦楽のための映像〉から〈イベリア〉、ファリャ：〈三角帽子〉、マスネ：管弦楽組曲第5番〈ナボリの風景〉、レスピーギ：〈ローマの松〉
- ⑤ メータ指揮ウィーン・フィル（2015/3/13/19：30）→リゲティ：〈アトモスフェール〉、マルクス：〈ウィーンの古い街並み〉、ブルックナー：交響曲第9番
- ⑥ （ホール左側会員のみ）ハンブソン・バリトンリサイタル（2015/4/19/19：30）→ベルク、ツェムリンスキー、シュトラウスの歌曲。（ホール右側会員のみ）ゲルハーヘル・バリトンリサイタル（2015/6/9/19：30）→マーラー：〈さすらう若人の歌〉〈リュッケルト・リーダー〉〈子どもの魔法の角笛〉
- ⑦ テミルカーノフ指揮ザンクトペテルブルク・フィル（2015/5/6/19：30）→ブラームス：ヴァイオリン協奏曲（Vn：フィッシャー）、ベートーヴェン：交響曲第3番〈英雄〉
- ⑧ ネゼ＝セガン指揮フィラデルフィア管（2015/5/6/19：30）→ブラームス：交響曲第3番、ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第3番（Pf：アックス）、R・シュトラウス：組曲〈バラの騎士〉

Iでは、マゼールがR・シュトラウスのホルン協奏曲とブルックナーの交響曲第3番を、ヤンソンスは、ドビュッシー〈イベリア〉、ファリャ〈三角帽子〉、マスネ〈ナボリの風景〉、レスピーギ〈ローマの松〉を、

テミルカーノフがベートーヴェンの〈英雄〉をそれぞれ指揮して新たなコンサートを行う。そこに、ムーティがシカゴ響と共にドビュッシーの〈海〉とスクリャーピンの〈神聖な詩〉で参戦し、さらにメータがウィーン・フィルとブルックナーの9番で加わるという刺激的な展開である。スター性が強く、独自の路線を突き進む新たな指揮者の登用がこのシリーズのカラーに繋がっている。ムーティはスクリャーピンをメインに、メータはリゲティとマルクスで変化球を投げるが、これらがシリーズ全体に新鮮な広がりを与えることは言うまでもない。なおムーティには独立した Riccardo-Muti-Zyklusなる3公演が組まれており、ヴェルディ〈レクイエム〉(完売)の他ストラヴィンスキーの〈火の鳥〉とシューマンの〈ライン〉(完売)、ハイドンの〈マリア・テレジア〉とシューベルトの〈グレート〉も予定されている。

興味深いのは、若手にヤニック・ネゼ＝セガンが起用されている点である。フィラデルフィア管の音楽監督として飛ぶ鳥を落とす勢いの彼が、ブラームスの交響曲第3番とベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番、そしてR・シュトラウスの〈バラの騎士〉組曲という手堅いプログラムを振るが、楽友協会ホールにフィラデルフィア・サウンドでウィーンに縁の作曲家たちの作品という取り合わせが興味を引く。ドイツでの活躍ぶりも評価されつつあるネゼ＝セガンの手腕の見せどころとなる。

さらにIでは、トーマス・ハンブソン(バルク、ツェムリンスキー、シュトラウス)とクリスチャン・ゲルハーヘル(マーラー)のバリトン・リサイタルがホール左右会員での選択肢として加わることで、他のシリーズとはまた違った特色がある。Das Goldene Musikvereinsabonnement IIでもオーケストラ・コンサートのシリーズにピアノ・リサイタル(バレンボイム)が挿入されていたが、日本ではよく見られる他ジャンルの聴衆導入を意図するこのような試みが、ウィーンでもその位置づけでなされているのかどうかは不明である。

全8公演のチケット価格は、最高740ユーロ(約107,000円)から最低43.20ユーロ(約6,000円・立席)まで8段階に設定されている(コンサート1回当たりの最高額は1枚約13,000円、最低額は1枚約3,600円)。

Meisterinterpreten IIでは新たな巨匠クラスが加わる。

- ① ウェルザー＝メスト指揮クリーヴランド管(9/15/19:30)→ヨルク・ヴィットマン:コンサート・オーヴァチュア〈コン・ブリオ〉, ブラームス:交響曲第3・2番
- ② シャイー指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管(10/21/19:30)→メンデルスゾーン:序曲〈フィンガルの洞窟〉, ヴァイオリン協奏曲ホ短調(ズナイダー), 交響曲第5番〈宗教改革〉
- ③ ムーティ指揮シカゴ響と楽友協会合唱団(11/2/19:30)→ヴェルディ:〈レクイエム〉
- ④ アンズネス指揮マーラー室内管(12/2/19:30)→ストラヴィンスキー:協奏曲二長調, ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第2・5番〈皇帝〉(Pf:アンズネスの弾き振り)
- ⑤ メータ指揮ウィーン・フィル(2015/3/8/11:00)→ブラームス:ピアノ協奏曲第2・1番(Pf:ブッフビンダー)
- ⑥ ビエロフラーベク指揮チェコ・フィルと楽友協会合唱団(2015/3/22/11:00)→マルティヌー:〈Dekmal für Lidice〉と交響曲第6番〈交響的幻想曲〉, ヤナーチェク:〈グラゴール・ミサ〉
- ⑦ バレンボイム・ピアノリサイタル(2015/3/8/19:30)→シューベルト:ソナタ変ロ長調, ト長調, ハ短調, D575, 894, 958
- ⑧ ネルソンス指揮バーミンガム市響(2015/6/6/19:30)→モーツァルト:ヴァイオリン協奏曲二長調KV 218(Vn:スクリデ), ブルックナー:交響曲第7番

パワーアップされたIIでは、ウェルザー＝メストがクリーヴランド管と共にブラームスの交響曲二曲を披露すれば、シャイーとドレスデン・シュターツカペレは得意のメンデルスゾーン・プログラムで臨む。しかもシャイーは、エックス・クライスラー・ガルネリを弾き、ギドン・クレーメル以後最もセンセーショナルなヴァイオリニスト(シカゴ・トリビューン紙)と評されるデンマーク人ニコライ・ズナイダーをホ短調協奏曲のソリストとして指名し、交響曲では最も得意とする第5番〈宗教改革〉という念の入れようである。さらに、アンズネスがマーラー室内オーケストラを相手にベートーヴェンのピアノ協奏曲2番と5番〈皇帝〉を弾き振りするステージにも注目したい。

I から出演の指揮者では、メータとウィーン・フィルがブッフビンダーによるブラームスのピアノ協奏曲全二曲という、演奏者も聴衆も体力と集中力の要る作品を取り上げ、ピエロフラーベクとチェコ・フィルは前出のマルティヌーとヤナーチェクを、ムーティは持ち味を最も発揮するだろうヴェルディの〈レクイエム〉を、そしてネルソンスはバーミンガム市響と共に、これらのシリーズでは珍しいモーツァルトのヴァイオリン協奏曲二長調KV218をラトビア生まれの中堅バイバ・スクリデと共演し、ブルックナーの7番で最後を締めくくる。そこに異種コンサートとしてバレンボイムのシューベルト・リサイタル（ピアノ・ソナタ 変ロ長調、ト長調、ハ短調、D575, 894, 958）が加えられている。Meisterinterpreten II ではベテラン勢が出揃った感はあるものの、インパクトの強い指揮者ともう一つ個性が見えにくい指揮者を組み合わせて売り出す巧みさも見られる。これは、他のシリーズにも共通する点である。

全8公演のチケット価格は、最高732ユーロ（約106,000円）から最低43.20ユーロ（約6,000円・立席）まで8段階に設定されている（コンサート1回当たりの最高額は1枚約13,000円、最低額は1枚約3,600円）。

さて、このシリーズⅢにはベルリン・フィルとサイモン・ラトルが新たに加わる。

- ① ウェルザー＝メスト指揮クリーヴランド管（9/14/19:30）→ブラームス：〈大学祝典序曲〉、ヨルク・ヴィットマン：フルート協奏曲（Fl：スミス）、ブラームス：交響曲第1番
- ② シャイアー指揮ゲヴァントハウス管（10/20/19:30）→ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲（Vn：ズナイダー）、ショスタコーヴィチ：交響曲第12番〈1917年〉
- ③ アンズネス指揮マーラー室内管と楽友協会合唱団（12/1/19:30）→ストラヴィンスキー：〈ダンバートン・オークス協奏曲〉、ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第3番（Pf：アンズネスの弾き振り）、シェーンベルク：〈地には平和を〉、ベートーヴェン：ピアノ、合唱、管弦楽のための幻想曲
- ④ ピエロフラーベク指揮チェコ・フィル（2015/3/19/19:30）→ドヴォジャーク：交響曲第7番、スーク：ヴァイオリンとオーケストラのための幻想曲（Vn：スパチェク）、ヤナーチェク：シンフォニエッタ
- ⑤ ラトル指揮ベルリン・フィル（2015/3/3/19:30）→ヤナーチェク：シンフォニエッタ、ブルックナー：交響曲第7番
- ⑥ バレンボイム・ピアノリサイタル（2015/5/10/11:00）→シューベルト：ソナタ変ホ長調、イ短調、ニ長調、D568, 784, 850
- ⑦ ミョンフン指揮シュターツカペレ・ドレスデン（2015/6/4/19:30）→ベートーヴェン：交響曲第2番、マーラー：交響曲第4番
- ⑧ ヤンソンス指揮ウィーン・フィルと楽友協会合唱団女性団員（2015/6/23/19:30）→マーラー：交響曲第3番

ラインナップからわかるようにプログラムはⅡよりさらに個性的になり、シャイアーはショスタコーヴィチの交響曲第12番、アンズネスはストラヴィンスキーの〈ダンバートン・オークス〉やシェーンベルクの〈地には平和を〉と、ベートーヴェンの合唱幻想曲にそれぞれ曲目を変えている。また、ミョンフンがシュターツカペレ・ドレスデンとの組み合わせでベートーヴェンの2番とマーラーの4番を、そして最後はヤンソンス・ウィーンフィルのマーラー3番でこのシリーズは閉じられる。ラトル・ベルリンフィルはライヴァル地ウィーンのためか1公演のみであり、しかもブルックナーの7番を敢えて取り上げるのはアプローチの違いを鮮明にしようとする意図だろうか。

全8公演のチケット価格は、最高747ユーロ（約108,000円）から最低43.20ユーロ（約6,000円・立席）まで8段階に設定されている（コンサート1回当たりの最高額は1枚約13,500円、最低額は1枚約3,700円）。

4 Wiener Symphoniker Zyklus A&B

このシリーズはDie Grosse Symphonie と同じくウィーン・フィルが主役となっており、それはタイトルにもはっきり記されている。

- ① ジョルダン指揮（11/15&16/19:30）→シューベルト：交響曲第7番〈未完成〉、ヴォルフ：〈Ausgewählte

Lieder), ブルックナー: 交響曲第1番

- ② シュテツフェンズ指揮 (12/13&14/19:30) ベートーヴェン: ピアノ協奏曲第5番〈皇帝〉(Pf: ブッフビンダー), フランク: 交響曲ニ短調
- ③ フェドセーエフ指揮 (2015/2/21&22/19:30) →ウエーバー: 〈魔弾の射手〉序曲, 交響曲第1番, リムスキー=コルサコフ: 〈シェエラザード〉
- ④ ジョルダン指揮 (2015/4/11&12/19:30) →R・シュトラウス: 〈ドン・キホーテ〉(Va: ミュラー, Vc: カプソン), シューベルト: 交響曲第8番〈グレート〉
- ⑤ ブロムシュテット指揮 (2015/6/20&21/19:30) →ベートーヴェン: 交響曲第4番, ニールセン: 交響曲第5番

全5公演のうちジョルダンの登壇が2回, しかも〈未完成〉とブルックナーの1番, そして〈ドン・キホーテ〉と〈グレート〉というウィーン色濃厚なプログラムは首席指揮者の中間試験のようなものだろう。フェドセーエフがロシアの代表作である〈シェエラザード〉を取り上げ, 現役最長老クラスのブロムシュテットが同じ北欧の代表的作曲家カール・ニールセンの交響曲第5番を演奏するなどプログラムも多彩さを増す。ベルリン・フィルの首席クラリネット奏者を務め, 現在は指揮者としても活動しているシュテツフェンズがどのくらい貢献するのは実演に接したことがないのでわからない。

こちらはチケット代金も安くなり, 全5公演のチケット価格は, 最高385ユーロ(約56,000円)から最低22.50ユーロ(約3,200円・立席)まで8段階に設定されている(コンサート1回当たりの最高額は1枚約11,500円, 最低額は1枚約2,700円)。

5 その他のシリーズ

上記までに考察したコンサート・シリーズは, ウィーン楽友協会で行われる全コンサートの一部である。他にも, 先に触れた Concentus Musicusや室内オーケストラ, 新シリーズ Die 4 Neuen Sale でのトークやジャズのシリーズ, 弦楽四重奏からソロ・コンサートまで多くのステージが展開されているが, オーケストラについてはこれでカバーしたので詳細は割愛する。他は, コルネリウス・マイスターやインゴ・メッツマッハーなどが中心となる ORF RSO Wienの概略だけ記して, 全体的な考察を急ごう。

- ① マイスター指揮 (10/2/19:30) →ムソルグスキー: 〈禿山の一夜〉, ショスタコーヴィチ: チェロ協奏曲第1番 (Vc: ハリエット・クリーフ), チャイコフスキー: 交響曲第6番〈悲愴〉
- ② Alain Altinoglu指揮 (12/12/19:30) →プロコフィエフ: 交響曲第1番〈古典交響曲〉, ハチャトリアン: ピアノ協奏曲 (Pf: ナレ・アルガマニャン), プーランク: 〈スタバト・マーテル〉 (Sp: プティボン)
- ③ メッツマッハー指揮+楽友協会合唱団 (2015/2/15/11:00) →シマノフスキ: コンサート・オーヴァチュア, 〈スタバト・マーテル〉, ルトスラフスキ: 〈葬送曲〉, 交響曲第4番
- ④ マイスター指揮 (2015/3/26/10:30) →レッシュ: 委嘱作品, マルタン: 七つの管楽器と弦楽とティンパニのための協奏曲, R・シュトラウス: 〈家庭交響曲〉
- ⑤ マイスター指揮 (2015/3/31/19:30) →ハイドン: 交響曲第103番〈太鼓連打〉, プーランク: オルガン, 弦楽とティンパニのための協奏曲 (Org: ラトリー), シベリウス: 交響曲第3番
- ⑥ ウィーン国立音楽大学指揮科卒業演奏会 (2015/6/18/19:30)

全6公演のチケット価格は, 最高260ユーロ(約37,000円)から最低22.50ユーロ(約3,200円・立席)まで8段階に設定されている(コンサート1回当たりの最高額は1枚約6,000円, 最低額は1枚約1,700円)。

6 全体的な考察

ウィーン楽友協会での, 主にオーケストラを対象としたコンサート・シリーズの特徴をまとめると次のようになる。

Das Goldene Musikvereinsabonnement は, IとIIの両方とも世界一線の指揮者やオーケストラが起用され, Iは幅広い聴衆にアピールできる名曲プログラムが中心であるのに対してIIではより個性的な指揮者が

登場し、プログラムも多彩になっていく。名曲プログラムとは言え、Iではアーノンクールとウィーン・フィルの〈未完成〉やヤンソンスとロイヤル・コンサートヘボウのマラーの4番、ミョンフンとフランス放送フィルの〈幻想交響曲〉など、どのような聴衆に対しても世界レベルでの演奏を聴かせられる安定したシリーズになっており、IIではティーレマンのブルックナーやピエロフラーベクのヤナーチェク、ネルソンスの〈アルプス交響曲〉などこの指揮者ならではの作品を…という特色が打ち出されてくる。また、ベテラン勢と並んでノットやネルソンスが出演するなど新鮮さも見られるが、中堅指揮者にとってこのシリーズに起用されることがいかに高い評価の証であるかがわかる。また、基本はオーケストラ・コンサートでありながら、異種企画としてバレンボイムのオールシューベルト・リサイタルが組まれるなど、Iより踏み込んだ聴衆が意識されている。

Die Grosse Symphonie A&Bでは9公演のうち初回を除く全8公演をウィーン響が担当し、ホーネックのようなベテランから中堅指揮者を經由してアフカムといった若手まで7人の指揮者が振り分ける趣向である。さながら指揮者コンクールのおもしろさがあり、曲目もそれぞれの背景や関心を反映していて多彩である。ホーネックに加え、2014年秋からウィーン響の首席指揮者を務めるフィリップ・ジョルダンの活躍ぶりが注目されている。ラトビア国立響を振り出しにヨーロッパで歩をかためるオラリ・エルツヤスロヴァキアのユライ・ヴァルチュハなど、次の世代のマエストロを占う意味でも興味深いシリーズである。前シリーズより小品が増え、一般の聴衆がナマ演奏で音楽を楽しむ充実度は上がっていると考えられる。

Meisterinterpreten は Das Goldene Musikvereinsabonnement にヴァリエーションを加えたもので、前シリーズに出演する指揮者陣がさらに個性的なプログラムで勝負する。Iではムーティやメータなどスター性の強い指揮者が加わって、新たな関心を掻き立てる。IIでは、シャイーやウエルザー＝メストが加わり、IIIのラトルとベルリン・フィルも相まって、主要な指揮者はほぼ出そろった感がある。Wiener Symphoniker Zyklus A&B は、Die Grosse Symphonie にヴァリエーションを加えたもので、ここでもジョルダンの活躍ぶりが目立っている。サロネン、ヤルヴィ、パッパノ、ハーディング、ベトレンコ、またウィーン・フィルと密接であったドゥダメルなど今シーズンは出演しない指揮者たちもいるが、ベテランから若手まで国際的に活躍する指揮者26人を集められるのは楽友協会ならではのことだろう。

さて、その中で最も頻繁に出演する指揮者は誰だろうか。別立てでシリーズが組まれているアーノンクールとムーティを除けば、上記の全シリーズを通して最も頻繁に登場するのはヤンソンスである。しかも4回ともすべて違うプログラムであり、オーケストラもロイヤル・コンサートヘボウ管が2回（マラーの4番とフランスもの）、後はバイエルン放響（ブラームスのヴァイオリン協奏曲と〈ペトルーシュカ〉）とウィーン・フィル（マラーの3番）と、多彩なコンサートを展開する。これは、幅広いレパートリーで高水準の演奏ができる彼への信頼の表れであろう。次はネルソンスの3回で、バーミンガム市響（〈パルシファル〉、ブルックナーの7番）とウィーン・フィル（〈アルプス交響曲〉）とのステージである。30代半ばながら出演シリーズは Das Goldene Musikvereinsabonnement と Meisterinterpreten のみであり、Die Grosse Symphonie や Wiener Symphoniker Zyklus に出演する同世代の他の指揮者たちとは明らかに違うランクの扱いである。ちなみにジョルダンも4回出演するものの、ウィーン響が主役となる後者二つのシリーズのみであるため、ネルソンスと同格に置くことはできない。テミルカーノフも3回の出演で、チャイコフスキー響モスクワ（〈ロメオとジュリエット〉、〈新世界〉、ドヴォジャークの〈スタバト・マーテル〉）とウィーン響（〈シェエラザード〉）でロシア・東欧ものを聴かせ、同じく3回のピエロフラーベクはチェコ・フィルのみとの共演で、東欧色の強い限られたプログラムのみである。ムーティとアーノンクールはさておき、ヤンソンス、ネルソンス、そしてジョルダンあたりが看板と言えよう。

次に演奏頻度の高い作曲家や作品に目を転じると、トップは16曲が取り上げられるシューベルトである。交響曲だけで〈未完成〉（2回）、〈悲劇的〉、第6番、〈グレート〉と出揃い、アーノンクールが Conventus Musicus でやらない〈未完成〉を Das Goldene Musikvereinsabonnement で取り上げるのは自然な流れとしても、ジョルダンが2曲（〈悲劇的〉と第6番）演奏するのはやはりウィーン響首席としての務めだろうか。加えてこの数には、バレンボイムがそれぞれ異なるシューベルトのソナタを3曲ずつ取り上げるリサイタルも含まれているので、純粋なオーケストラ・コンサートの曲目だけとなるとこれに次ぐベートーヴェンやブラームスも上位に挙がってくる。

ベートーヴェンでは、交響曲第2番、3番〈英雄〉、4番や9番（2回）を初め、ピアノ協奏曲の第2番、3番（2回）、5番〈皇帝〉（2回）、そしてヴァイオリン協奏曲や合唱幻想曲などの代表作が演奏される。ブラームスも四つの交響曲（第3番は2回）に2曲のピアノ協奏曲、二長調のヴァイオリン協奏曲（2回）に〈大学祝典序曲〉と衰えない人気ぶりである。そして大作ゆえに目につくのがブルックナーとマーラーの交響曲であり、ブルックナーは第1番、3番（2回）、4番、7番（2回）、9番（2回）と3曲が複数回取り上げられるし、マーラーは、第1番、2番、3番、4番と演奏され、最もウィーン風と言われる第4番は異なる指揮者とオーケストラで3回取り上げられる（日本で人気の第5番は無い）。次いでハイドンの4曲（交響曲第85番、86番、94番、チェロ協奏曲第1番）、メンデルスゾーンの3曲（〈イタリア〉、ヴァイオリン協奏曲、ピアノ協奏曲第1番。-序曲は除外-）となる。おもしろいことに、モーツァルトは現代ものと同じく1曲のみで、ヴァイオリン協奏曲の二長調が取り上げられる（Concentus Musicusでもセレナーデと交響曲が1曲ずつ）のみである。

このように多彩なシリーズであるにもかかわらず、そのどれもが最高では1回1万5千円を切り、最低では4千円を切るチケット料金に抑えられていることも指摘しておかなければならない。マゼール、ムーティ、ヤンソンス、ラトルなどが出演するシリーズでこの値段であり、ウィーン響が主体のシリーズでは最低は3千円を切るという、学生でも容易に手の届く値段である。国の補助やスポンサーシップの貢献が大きいにしても、羨ましい限りである。広報も巧みであり、ポスターは周知のように単なる告知にすぎないが、全シリーズを網羅した冊子、各シリーズごとのパンフレット、月ごとの予定表はもちろん、各指揮者やコンサートの情報を発信する新聞まで出して、地域住民か観光客かを問わずこまめに目に触れる機会を作っている。

以上、ウィーン楽友協会のオーケストラ・コンサートのシリーズに焦点を当てて概観したが、引き続きコツェルトハウスと二つの歌劇場に範囲を広げて考察したい。

注

- 1 Gesellschaft der Musikfreunde in Wien, "Abonnementkonzert 2014/2015", 並びに出演者の略歴等は、本人のホームページや英語版ウェブサイトによった。